

2022 年度 横浜商科大学地域貢献共同事業 研究成果の概要

研究課題名 子育て支援プロジェクト

研究代表者 教授 東風 安生

<プロジェクトの背景>

2021 年度からスタートした事業である。少子化社会において子育て支援は喫緊の課題である。横浜市鶴見区に位置する本学つるみキャンパスの近隣には多くの マンションやアパートが立ち並ぶ。就学前の幼児や小学生も多い。3 世帯住宅があまり見られない。若い保護者は自身も働き子育てをしていると想像する。しかし、コロナ禍の現在どのように子育てをしているか外からは見えにくい。そこで大学の教職センターと言う高等教育機関を設けている本学が子育て支援に悩み苦しむ若い世代の親を支援できたらよいと考えた。事業名を子育て支援プロジェクトとした。親が子育て相談をしている間、子供たちは学生と共にキャンパスで、昔からの伝承遊びをして過ごす。子どもとの遊び体験は、将来教職に就きたいと考える学生にとってはまたとない機会となる。伝承遊びは、雨でも晴天でもできる。レパトリーがあり安全でもある。子育て相談をしている約 90~120 分の間に保護者は日々の悩みから解放された時間を設けることで、地域貢献の役割が果たせると考えた。2022 年度からは土曜日に限定せず、オンラインによる相談体制もできるようにして、まずは相談からスタートできるように門戸を広げるようにした。

<プロジェクトの具体的な内容>

第一に、学生にとっての学びの場をつくる。2021 年 4 月に本学東風ゼミで本事業の説明を行い学生アルバイトの募集をかける。決まった学生とともに、つるみキャンパス近郊のマンションやアパート、区役所や図書館などに掲示するポスターを考え、作成し、掲示する。チラシも一緒に作成し、必要に応じて配布する。令和 3 年 6 月 1 日~12 月 31 日までの半年間、毎週土曜日の午前中に、子育て支援の相談を実施する。予約をあらかじめメールで取り、それに従って、学生のシフトを組む。学生は午前 9 時~12 時までの 3 時間を拘束する。子育て支援の相談は、最初はオンラインやメールで具体的な内容をうかがい、その後学生と子どもと一緒に遊ぶ機会を設けていくような流れとした。

親子で子育て相談のメリットは、子どもを一人にできない保護者やどこかに連れて行き遊んでもらえる機会を探している保護者にとって本学のキャンパスで遊んでくれる大学生がいることは魅力的である。また大学の教員が、子育ての相談にのってくれることは大変に信頼でき、一方で個人情報 が学校関係者や近所づきあい他人に漏れることもない。事業責任者は、相談については守秘義務を守り、あくまでその時間のセッションだけのアドバイスとなる。継続して子育て相談をしたい場合は、あらためて相談予約をとる。保護者との相談の過程で他機関との連携が必要だと感じた場合は、できる限り早急に、本事業責任者から大学を通じて、協働事業者である横浜市鶴見区福祉保健センターこども家庭支援課様に連絡をする。

<プロジェクトの成果と今後の課題>

昨年度に引き続きゼミの学生をアルバイトとして登録し、子育て支援のニーズに応じて対応できるようにした。(東風ゼミ 3 年 男子学生 1 名) また 町内会(東寺尾南部明朗町会 齋藤様)のご協力を得て、子育て支援のチラシを 10 枚程度 町内の掲示板に貼らせてもらった。大学総務課にも依頼し、正門前掲示板にもチラシを 12 月まで掲示した。結果的に 1 つの家庭からの連絡があった。(表 1 参照)

相談内容については相談者側の個人情報になるのでここで紹介はできない。ただし、オンラインの実施でのみになってしまった。学生については、待機してオンラインでも子どもと遊べるように、画面上でのじゃんけんゲームなど用意してもらった。しかし、家庭からの相談は、両親のみであり、就学を迎えた子どもが、特別支援教育を受けることができる学校に進学するか普通学級の学校に進学するかのアドバイスを受けたい要望だけであった。残念ながら、2 度目の相談はなく、学生が当該家庭の子どもと遊ぶ機会は発生しなかった。鶴見区こども家庭支援課にこの結果を報告した。

区としては、子育てに関する家庭の多様なニーズに応える一つの選択肢としてこれからも大学ができる方策を追究してほしいとの要望を受けた。より効果的な方法を今後も検討していきたい。

表 1 子育て相談を実施した家庭

	家庭 1
相談者	C さん (両親)
実施回数	1 回
相談方法	オンライン
備考	子どもの進学相談。特別支援学級による支援制度についての相談。